

令和五年度 入学試験問題

国 語

理・医・農

二月二十六日(日)一四時一〇分—一四時五五分

注意事項

- 1、試験開始の合図まで、この冊子を開いてはいけない。
- 2、冊子のページ数は四ページ(問題紙三ページ、答案紙一ページ)である。
- 3、落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあつたら、ただちに申し出よ。
- 4、解答にかかる前に答案紙をていねいに切り離し、所定の二箇所に受験番号を記入せよ。
- 5、解答は答案紙の所定の欄に記入せよ。所定の欄以外に書いた解答は無効である。
- 6、試験終了後、退室の許可があるまでは、退室してはいけない。
- 7、答案紙は持ち帰ってはいけない。問題冊子は持ち帰ってもよい。

3月上旬までに、東進公式サイト
「東進ドットコム」解答速報ページに
解答例を掲載する予定です。
解答のポイントについても随時更新の予定です。
成績帳票とあわせて解答例を確認し、
しっかり復習することで、志望校の学習に役立てましょう。



<https://www.toshin.com>

わたしたちは、たとえば音楽を聞いたとき、絵画を見たとき、あるいは、ある風景に出合ったとき、あるいは、スポーツの試合を観戦したとき、その姿と音に心を震わせ、大いに心が動かされる。あるいは、動物の仕草に癒^aされ、あるいは文学作品や演劇の舞台に、強い印象を受ける。これらは一般的に善いものであることが宣伝されたものであるから、わたしたちは安心してほかの多くの人々と一緒に、自分の心がその印象によって動かされるままに、その感動を経験する。じっさい、映像に圧倒される経験をもつとき、わたしたちは自分の心が一時的にその映像に心がすっかり占^bめられてしまっていることを意識することができる。多くのメディアが、その喜びを人々に伝える。

一方、日常、耳にするだけの「ことば」になると、わたしたちはあまり気にせず聞いてる。しかし、視覚を刺激するたんなる事物であっても、人がそれに注目するのは「ことば」による「名付け」があればこそである。たとえばタンポポを見たとき、その名を知ることによって、わたしたちはその姿を心にあざやかに印象付けることができる。一方、名を知らない鳥の姿をとらえたとき、その姿は明確に印象付けられない。じっさい一般的に感覚像の認識は、その名前を知ることではじめてすっかりと心にハ^cア^cクされたものになる。人間の名だけではなく、植物の名も、鳥の名も、知らなければ感覚像はほやけたものになる。わたしたちの心は、感覚刺激だけでなく、そこに伴う「ことば」によって大きく変わる。

わたしたちは「ことば」がわたしたちの認識に及ぼす力について考えてみなければならぬ。たとえば「ことば」の発言者がほかの人であったとき、どの程度「他者のことば」に自分の心が大きく動かされているか、わたしたちは考えてみる必要がある。

自分が対象事物の名前を知ることによって、自分に見えてくる世界が翌日から異なるように、わたしたちは他者の発言を聞くことによって、その「ことば」に、いつときでも心は「占められ」、「支配されている」。人は、音楽や映像に心を動かされるだけでなく、それとは異なって、日常、ふだん遣いの「ことば」に、じつは大いに動かされている。音楽や映像なら、心は外から動かされているが、「ことば」の場合は、心は、内から動かされている。なぜなら、「ことば」は、自分の心が「それによって」動いている、あるいは、「それに合わせて」心が生まれ、心が維持され、心が育つ力だからである。

じっさい、わたしたちは「ことば」でいろいろなものごとを「考える」。今の映画は良かったとか、絵画は良かったとか、風景はすばらしいとか、印象を「ことば」にする。しかしそのとたん、わたしたちの心は、視覚に映った映像や聴覚にヒビいた音^dによって動くとは異なって、直接その「ことばに沿って」、「確実に動いている」。

じっさい、「考える」はたらしきをするのが、「心」である。そうだとすれば、「ことば」は、それが自分のことばであろうと他者のことばであろうと、「考える」とき、その「ことば通り」に心は動いている。それゆえ、それが「他者のことば」であるとき、それを疑わずに聞く「わたしの心」は、その「ことばに沿う仕方」で「自ら動くこと」で、「自分の心の姿」を、いったんは内側からあらたにしている。そして他者のことばを疑うときでも、わたしたちは、とりあえず「相手のことば」に耳を傾ける。なぜなら、それが人間として誠実なことだからである。そして耳を傾けるなら、やはりわたしたちの心は、その「ことばに沿って」動いている。

じっさい、生き生きとした「ことば」によって伝えられたものは、直接にわたしたちの心に入ってきて、わたしたちの心を、日々、支配している。たとえその後疑問が湧いてくるとしても、いったんは「他者のことば」に「己の心をゆだねる」のが、「ことば」に対するわたしたち人間の、通常の性である。

日常、わたしたちは、「他者のことば」は、それを聞いて、その意味を理解して、それに応じて答えなければならぬと、無意識のうちに思っている。ふだん、だれかが口を開けば、それが何事であれ、「聞こう」とするのは、そうした理由があつてのことである。なぜなら、「他者のことば」を理解しないことは、その「ことば」が通用している世界から「自分自身を切り離すこと」を意味するからである。わたしたちが前のめりで「他者のことばを聞こう」とするのは、自分が世界から切り離されることを、言い換えれば、孤独になることを、わたしたちが望んでいないからである。わたしたちは、自分が聞く「他者のことば」を理解することで、その他者が属している共同世界に、自分もまた属していることを、そのつど、無意識に確認する。

反対に、理解できなければ、わたしたちは「相手の共同世界」に自分が入ることができていないことを認めざるを得ない。①
のときわたしたちは孤独を感じる。したがって、わたしたちは通常、「相手のことば」を、まずは理解しようとして聞く。しかしながら他者の言うことを理解しようとして聞くことは、相手のことばが意味するそのままに、自分の心のなかで「他者のことば」が再構成されることを、すすんで許すことである。そしてわたしたちの心は、ほんの一瞬であっても、そのとき相手のことばに「支配されるとき」をもつ。

なぜなら、「ことば」がはたらいっているところに、わたしたちの「理性」のはたらきがあるからである。じっさい、「理性」は、古典ギリシア語で「ロゴス」であり、同じく「ことば」は、「ロゴス」だからである。したがって、相手のことばを聞き取っている

とき、わたしたちの理性は、その「相手のことば」によって「相手の理性と同じように」再構成されている。とすれば、わたしたちの理性はそのとき、一瞬であつても、「他者のことば(理性)」に、確実に支配されている。

したがつて、わたしたちは映像以上に、「ことば」に騙されやすいのである。しかも「理性的」であろうとすることは、「ことば」を大事にしようとする事だから、理性的であろうとしている人ほど、「相手のことばに沿つて」無意識のうちに考えようとする。したがつて、人は知的であるほど、じつは騙されやすい。それゆえ、ことば巧みに騙された人を笑うことは、むしろ理性的であろうと努めている人を笑うことである。

一方、他者が自分のことばを語っているとき、他者の理性は、その人物が語っている「ことば」によって構成されている。したがつて、一方が話し、他方が聞いているとき、一方は他方の理性の「ことば」と、同じ「ことば」によって自分の理性を再構成している。それゆえ、二つの理性は、一方の発言された「ことば」において「協働」している。したがつて、「ことば」が複数の人間の間で「通じる」ことが意味しているのは、「ことば」によって複数の理性が「協働する」事態である。

このことによつて、人々の間で、何らかの協力が可能になる。人類は、かつては少数の集団で協力し合うことによつて大自然の中で生き残りの道を見つけてきた。だとすれば、それは集団で同じ「ことば」をもつことによつてであると、考えることができる。それゆえにまた、かつて人類が生き残りのために必要とした「ことば」は、文明が発展した今でも、わたしたちが他者との「協力体制」をキズこうとしたとき、すなわち、他者と協力して何事かを成していこうとするとき、その傾向を強力に維持している。それゆえ、わたしたちは、むしろ自然に(ほとんど本能的に)「他者のことば」に、自分の理性の再構成をまかせてしまふ。

じつさい、わたしたちは他者のことばに促されて、明らかに間違っているのにもかかわらず、つい言われるままに行動してしまうことがある。警察がどれだけ注意を促しても「ことば」だけの電話にわたしたちは騙されてしまひやすい。それは、「ことば」が、人類の心に宿している「協働のための一致」という原初的な力によるのである。すなわち、他者のことばであつても、その「ことば」は、自分の理性(判断力)を、いったんは構成する。

それは幾分かは遺伝的であつて、わたしたちは、そのことにはまるで無^gテイコウである。わたしたちが、聞いた「ことば」の内容に疑問をもつ、あるいは不真実に気づく、ということとは、ただ、自分のなかで、今までもっていた「ことば」との齟齬^hが感じられたときであり、その「ことば」の内容を「あらためて吟味ⁱ」することができたとき、そのときだけであつて、吟味できなければ、自分の理性が受け取った「ことば」が、そのまま自分の理性の「真理」となる。すなわち、それが真実だと、信じてしまふ。

それゆえ、いつもわたしたちは、自分の理性の判断で、他者に言われた通りに考え、疑問がなければ、その通りに行動するのである。③第三者から見れば、夢遊病者のように見えるとしても、本人の理性は、人類の理性の設計通り協働的にはたらいているのであつて、きわめて健全なのである。

言うまでもなく、「騙される」という事件が発生するのは、一方に、騙す人間が居るからである。しかし、別の見方をすると、このような事例が示しているのは、むしろ「ことば」が、わたしたちが行動を判断するうえで、決定的な原因になっているという事実である。じつさい、^④ことば抜きに、臭いや絵や音楽だけで、人を騙すことはむずかしい。

したがつて、「ことば」は、だれが発声するものであれ、またそれが正しいか正しくないかは別として、それを聞く人の間で同じ「理性」を構成し、同じ「判断」を構成し、それが人間の「思考」と、それにもとづく「行動」を決定することは、^jフヘン的に見られることである。

(八木雄二『一人称単数の哲学』による)

【注】○感覚刺激——感覚受容器によつて受け入れられ、視覚・聴覚・味覚・嗅覚・皮膚感覚などの各種感覚を起こさせる刺激。

問一 傍線部 a ～ j のカタカナは漢字に、漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。

問二 傍線部①における「孤独」とはどのようなことを指すのか、本文に即して五〇字以内で説明せよ(句読点・かっこ類も字数に含める)。

問三 傍線部②「人は知的であるほど、じつは騙されやすい」とはどういうことか、本文に即して一〇〇字以内で説明せよ(句読点・かっこ類も字数に含める)。

問四 傍線部③において、「きわめて健全なのである」と筆者が言うのはなぜか、その理由を本文に即して一三〇字以内でまとめよ(句読点・かっこ類も字数に含める)。

問五 傍線部④「ことは抜きに、臭いや絵や音楽だけで、人を騙すことはむずかしい」とあるが、その理由を本文に即して一〇〇字以内でまとめよ(句読点・かっこ類も字数に含める)。

問六 次のア～オの記述のうち、本文の内容と合致しているものを二つ選び、記号で答えよ。

ア 人間の通常の性として、「他者のことば」に自分の心をゆだねることはしない。

イ 自分の理性が受け取った「ことば」こそが真実であり、わたしたちはいつもその「ことば」通りに行動する。

ウ 人類は、集団で同じ「ことば」をもち、協力し合うことによって、大自然の中で生き残ってきた。

エ 信頼できる他者の発した正しい「ことば」だけが人間の思考と行動を決定する。

オ 名を知らない植物や鳥を見ただけでは、心にしっかりと印象付けられることはない。